

『心中二枚絵草紙』の方法

——「女のドラマ」の展開——

小川 嘉 昭

はじめに

(1) 状況の複雑化について

元禄十六年の『曾根崎心中』において、近松は「女のドラマ」を
発見した^①。その三年後の宝永三年、心中浄るりの第二作『心中二枚

絵草紙』が書かれるのであるが、『曾根崎心中』の影響が強いと言
われるこの作品において、「女のドラマ」がどのように継承され、
また、どのように展開したのかを考えようとするのが、小稿の目的
である。

なお、考察の手順として、『心中二枚絵草紙』に関しての二・三
の一般的な疑問点をまず提示し、それに対する解答を考えることを
通して、本曲において「女のドラマ」があるのかないのか、また、
あるとすればそれはどのような形で有効なものとなっているのかを
考えてみたい。

まず、これまでの研究が、本曲のどのような点を問題にしてきた
かを考えてみたい。

現在まで強い影響力を持っている論考のうち、その初期のものは、
やはり、広末保氏の『近松序説』^②であろう。それは、近松が、養父
や義弟との義理を、市郎右衛門・お島の恋愛悲劇の中に導入したと
いう氏の御指摘が、現在までの研究の出発点になったという意味に
おいてである。『曾根崎心中』から一步踏み出したこの義理の導入
が、しかし、義理の葛藤を描くまでに至っていないことも同時に
『近松序説』において指摘され、以後の諸先学による本曲の作品論
にも、この問題に対するより詳細な考察が進められている。それは、
たとえば、「家族道德の問題が大きくとり入れられてきたことは注

目してよい」とされながらも「第一テーマはあくまでも、お島市郎右衛門の至純な愛であ」と見られる諏訪春雄氏のように、家族との葛藤が強く表面に出ることがなかったことを、むしろ、本曲の独自性とされる捉え方も生んでいくのだが、いずれにせよ、「状況の複雑化が恋愛悲劇の葛藤のなかに統一されなかった」^④ 事実の確認と、その事実をどのように評価するかが、『近松序説』以後の研究の大きなテーマとなっていることは明らかである。以下、この問題に關しての諸先学の研究を通観しておく。

広末保氏は前述のごとく、「状況の複雑化が恋愛悲劇の葛藤のなかに統一されえなかつた」^⑤ 作品と規定されたが、特に、「殆んど書いていない。計算はされているが実際には書いていない」と述べられた中之巻における介右衛門と市郎右衛門の義理の欠如を、一歩進めた形で措定された論考として松崎仁氏の論文がある。^⑥ 松崎氏はこの中で、市郎右衛門と介右衛門の義理の葛藤の欠如を市郎右衛門の側の「内的な義理の葛藤の欠如」として措定され、さらに、その欠如の原因を当時の歌舞伎狂言との関連において究明されている。すなわち、氏は、『心中二枚絵草紙』中之巻が歌舞伎狂言『卯月その暁の明星が茶屋』の趣向取りであることを取り上げられ、近松が義理の葛藤をその世話浄るりに導入しようとする際、元禄期の世話狂言に寄りがかりすぎたことに「市郎右衛門の内的な義理の葛藤

の欠如」の原因を求められたのである。

松崎氏の論に見られるように、本曲における義理の葛藤の欠如を当時の芸能環境の中で捉え直すことで、その欠如の再確認と、より一層の実体解明が行なわれる一方、前述の諏訪氏の論考に見られるように、義理の葛藤の欠如を含み込んだ本曲の、ドラマとしての評価基準をどこに置くかを再検討する試みもなされている。諏訪氏が、お島市郎右衛門の恋愛を描くことが本曲の中心テーマであるとされたことはすでに述べたが、諏訪氏以後のこの方向からの研究（評価基準の再検討）の近年のものとして井口洋氏の論文についてもふれておきたい。^⑦

井口氏は「内的な義理の葛藤」が市郎右衛門に認められないことは、現に作品に即して確かな事実である」（傍点原文）と松崎氏の説を追認されながらも、「だからといって、そのことはただちに、作品の欠陥ないし作者の未熟を証示することであろうか」との疑問を示され、本曲の「ドラマ」を下之巻における善次郎の「発起」と市郎右衛門の行為に見い出そうとされた。氏は、下之巻で、お島のことばに改心「発起」した善次郎が兄市郎右衛門を捜しに天満屋へ来た際、市郎右衛門が声をかけなかった行為による両者の間の食い違いを「単に時間的空間的な偶然の所産ではなかつた」とされ、それを、市郎右衛門の自己犠牲の不徹底と、それにつながる彼自身の

側にある「心の翳り」による人間の営為の結果と見られた。市郎右衛門のこの姿と、善次郎の「発起」とを重ね合わせて、「因果」や「前世の業」に押し隔てられながらも、自らの意志で行動しようとする人間の営為の中に本曲の「ドラマ」を見ようとされたのが井口氏の論文であると考えることができよう。

これらの『心中二枚絵草紙』についての論考を見てくると、やはり本曲には、広末氏の指摘された義理の葛藤の欠如が、それをどのように評価するかは別としても、一つの事実としては確認されているようである。

ところで、近松が、『曾根崎心中』から一歩踏み出し、その世話浄るりに主人公たちを取り巻く状況の複雑化を持ち込もうとした時、なぜ男主人公の側にのみその複雑化を持ち込もうとしたのだろうか。近松が義理の葛藤を『心中二枚絵草紙』に持ち込もうと試みたこと、そして、それが不十分なものに終わったことは諸先学の御研究で明らかである。そこで私は、少し視点をかえて、近松が状況の複雑化を意図した時、少なくとも『心中二枚絵草紙』の段階では、それを女主人公の側にはなく、男主人公である市郎右衛門の側に設定したことの意味を考えてみたいと思う。

たとえば、上之巻における市郎右衛門と明石の貞とお島をめぐる翰あてが中之巻・下之巻に恋愛の悲劇として発展していかないこと

の指摘はしばしばされるところであるが、この上之巻で、お島が市郎右衛門と貞の間で苦慮する姿にも、状況の複雑化がお島の側に設定しえたものであることが示されている。

。ある時は余国の大神宮に身請の談合をしかけ。あるひは紋日をかづかせ引日の立前あとからはげる禿頭。

。勤する身が客に引かれ芝居へ行つたが珍しいか。舟に乗るが不思議なか。

。ヲムよい推量追付お島を請けてみせう。なんぼせいでも張りあうても金で語る浄瑠璃は。ちつと咽に詰まらうぞ^⑧

市郎右衛門・お島・貞によるこれらのことばによって、「売りもの買ひもの」である遊女の社会的立場がはっきりと劇の中に持ち込まれ、特に最後の貞のことばには、お島の「身請け」の可能性もほめかされている。とすると、上之巻ではお島の側にも状況の複雑化の萌芽があったことになるのだが、近松はそれをこれ以上発展させようとしなかった。そして、発展させなかったことが上之巻と中・下之巻との分裂を指摘される由縁なのであるが、私はむしろ、(先に述べたように)近松が状況の複雑化をこれ以上お島の側に引き起こさなかったことの意味を考えていると思う。だが、その問題に解答を与える前に、今少し、本曲の内容を分析することで、本曲に関する疑問点の提示をあと二つほど行っておきたい。

(2) 偶然性のドラマについて

本曲が義理の葛藤を欠いた（もしくは描ききっていない）ドラマであることは、われわれが一般に抱いている西洋の古典主義に基づくドラマ観からすると、質的に一段低く見られるようなものであるが、本曲をそういつたドラマ観から見た時、そのプロットが偶然性によりかかりすぎているということも欠点と見なされるようなものである。具体的には次の二点において見られるものである。

(1) 善次郎が報恩講の金を盗み、その罪を市郎右衛門が負うことになる件（中之巻）

(2) 「発起」した善次郎が兄の命を助けようとするが、結局は彼の「発起」が市郎右衛門に伝わらなかつた件（下之巻）

まず(1)の件についてだが、この件での市郎右衛門は次の二つの点で不運であった。一つは、善次郎が盗んだ銭の入った神酒徳利の酒を飲むとしたことであり、もう一つは、お島からの手紙を捜して父の鼻紙袋を開けている所を介右衛門に見つかったことである。しかも、これらの不運は善次郎の場あたりの行動によってもたらされたものであった。そもそも、講の金を盗もうとした善次郎の行為そのものがかなり衝動性の強いものであったことは、盗みの場面の彼の狼狽ぶりから知れるところである。そして、善次郎が父親の

声に一步銭を神酒徳利へ隠したのも、「置所に動転して口へ入れた目へ入れたたり。うろたへ廻つて釜の上なる神酒徳利へ」入れたものであり、お島からの手紙を捜そうとして鼻紙袋に手を掛けた市郎右衛門の行為も、神酒徳利を隠し取り、いっさんに現場を離れようとした善次郎が、市郎右衛門の気をそらせるために教唆したことによるものだった。もし、事件の発覚が、市郎右衛門が鼻紙を開けているその瞬間でなかつたなら、その嫌疑は、講の金の存在を知る善次郎にこそ向けられるべきものであり、その意味において、市郎右衛門の濡衣は、極めて計画性に乏しい善次郎の行動と偶然の積み重ねによつてもたらされたものであった。^⑩

次に(2)の件についてだが、これに関連する場面は二つある。一つは、お島が酔いに紛らせて天満屋の主人に暇を乞う場面。お島のとばを門口で聞いていた市郎右衛門と善次郎はお互いの存在に気づかない。もう一つは、兄の命を助けるべく、善次郎が再び天満屋を馳せ参じる場面。一旦は善次郎を討とうとする市郎右衛門であったが、「いや／＼見苦し。さいごの邪魔」と心を鎮めてしまう。このどちらかの場面で、善次郎と市郎右衛門が顔を合わせていたなら、そして、善次郎の「発起」が兄に伝わっていたなら、市郎右衛門とお島の命は、まさに「死なで止みなん」命であったのである。ただ、第一の場面はともかくとして、第二の場面を本当に偶然によるすれ

違いと考へ得るかどうかには、なお疑問の余地がある。天満屋に馳せ参じた善次郎から身を隠したのは市郎右衛門自身の自主的な選択であり、彼の心の問題としてこの局面を捉えた時、確かに、このずれ違いを「偶然」ということばで片づけるのはむずかしそうである。そして、兄弟のこのずれ違いから生じた心中悲劇を、市郎右衛門その人の行為による悲劇とみることもできそうである。だが私は、おそらく、近松は市郎右衛門の人間としての営為が主人公たちの破局を招いたところに悲劇性を実現させようとしたのではないと思う。お島・市郎右衛門が心中に追いやられたこの悲劇に、本曲を享受するもの（特に浄るりを耳で聴いていた当時の観客）が涙するとすれば、やはり、偶然の所産によって窃盗の濡衣を着せられ、そしてラストチャンスであった善次郎の「発起」も結局は市郎右衛門に伝わらなかつたこと、その運命に弄ばれる姿に対する憐憫に根ざすものにちがいないし、近松もまた、そのような書き方をしていると思われる。そのあたりのことを確かめておく。

(i)鼻紙袋へ文をも入れ。ぐる／＼巻きし紙縫より。細きお島と一命の終るはしとぞなりにける。(中之巻)

(ii)黄金は人の身を富ます宝なれども此の身には。命をきざむ刃となる善悪こそは哀なれ。(中之巻)

(iii)心は三つに変われども同じ涙に。曇る月時雨の。闇の本意なき

『心中二枚絵草紙』の方法

よ。(下之巻)

(iv)かくと心を語りなば。死なで止みなんふたつの命へだて疑ふ因果と因果。定まる業ぞ力なき。(下之巻)

(v)お初徳兵衛のその暁の。夢も破れてまだ間もないに心中宿世の報の業か。(下之巻)

(i)はお島から届いた文を介右衛門が鼻紙袋に入れる場面の、(ii)は善次郎が神酒徳利の中に隠した金を、そうとは知らぬ市郎右衛門が懐に入れる場面の、(iii)はお島が酔いに紛らせて天満屋の主人に暇乞いをし、善次郎と市郎右衛門が門口でそれを聞く場面の、(iv)は天満屋に兄を捜しに来た善次郎から市郎右衛門が身を隠す場面の、(v)は心中道行の、それぞれの詞章である。これらはいずれも、この成行が偶然によること、あるいは二人が運命に弄ばれていることを享受者に印象づけるものである。したがって、私はやはり、本曲を広い意味での偶然性に頼ったドラマと見ておきたい。

だが、しかし、偶然性に頼ったドラマということが、ほんとうに本曲のドラマとしての質の低さを意味するのだろうか。たしかに、偶然性の多用はドラマの緊張感を損い、分裂的印象を強めることになるだろう。あるいは、本曲に限っていえば、偶然の所産によって心中に追い込まれなければならなかつた主人公の運命を描くことは、それを見つめる観客に後味の悪い惨めさを感じさせることになるか

もしれない。だが、問題は、偶然性を含み込んだプロットをしつかりと一箇所につなぎとめ、それを統一されたものとする何か、そして、偶然の所産によって心中に追い込まなければならない運命を背負った主人公の姿が、それを見つめる観客の目にミゼラブルなものに映らないようにする何か、そこにあるのかなのかということであろう。そして、そのような「何か」が本曲にあるとして、それはいったい何だろうか。私は、そこにお島の力を予想しているのだが、そのことについても後述のこととする。

(3) 市郎右衛門の人物造型について

ここで市郎右衛門の人物造型についても少し見ておきたい。

市郎右衛門の人物造型を、同じ事件に取材した『心中抱合河』

(錦文流・作)のそれと比較する時、そのイメージが著しく異つて

いることについても、松崎氏が詳しく考察しておられる。講中の掛

け金窃盗を市郎右衛門の所業とするなど、『心中抱合河』の市郎右

衛門が折り紙付の放蕩者として描かれているのに対し、『心中二枚

絵草紙』における市郎右衛門から不誠実・不徳義を感じとることは

困難である。近松と文流のこのような人物造型の違いを、松崎氏は、

「常識的倫理感覚から主人公を守」ろうとする近松の姿勢と説明され、そのことに関連して、敵役としての善次郎設定の意味も併せて

明らかにされた。「実説に伝えられた主人公の道義的汚点をできるだけ拭い去るために、犯罪の噂を弟に転嫁しつつ、無実の濡衣として合理化すること」が善次郎設定の意味であるとされる氏の御指摘に、市郎右衛門と善次郎の人物造型についての近松の姿勢が語りつくされているようであるが、それでは、錦文流と近松における市郎右衛門の造型の違いは具体的にはどのような形で表わされているのだろうか。

松崎氏は、市郎右衛門が講の金を盗んだという設定と、中之巻での市郎右衛門に対する兄の意見書の場面を例に引かれながら先の結論を導き出されたが、この外の、文流と近松の人物造型に対する意識の違いが明らかにになりそうな箇所を、『心中抱合河』の本文から抜き出してみた。^⑩

①色のちまたにふみまよひ親はらからのあさめも聞ず。

冒頭、市郎右衛門が登場する時すでに放蕩者として紹介される。

②いか様小判の身に成つても。じゆつない事では有まいかと。

ゑてかつて成物語。

③かねを出させて間もなきに。又伯父方へと行末は。いかに成なんおぼつかな。

②は伯父の財産のことを語る市郎右衛門の語り口を批判したものであり、③は伯父に金の無心をしに行く彼の姿を揶揄したものである。

いずれも地の文において市郎右衛門の行動に対しての作者の評価が表われたものである。また、登場人物の科白も次のように書かれている。

④ 去とてはふとどき物。聞ば此比其方は。家出をしたるときこへし故。新介夫婦をよびよせて。様子をとくと聞たるが。皆其方がよふないぞ。少しはたしなめうつけもの。

⑤ ハア性のよい甥のとの。是はどこから出られたぞ。伯父の死にめにあはぬ而已か。なま女ばうを引つれて。何しにきたぞ。たはけ物。人でなしがといひ捨て。

④は天満屋で市郎右衛門が伯父道味に叱責されることば。⑤は、道味の死を知らずに金の無心に来た市郎右衛門に、弔問客が投げつけることばである。伯父道味は、市郎右衛門の後見人ともいふべき存在であるが、市郎右衛門との間にそれほど強い葛藤関係が想定される人物ではない。また、⑤の弔問客は市郎右衛門にとっては全くの第三者である。放蕩者としての市郎右衛門を描くにあたって、文流は、意見事の趣向取りや、事実を引きずられたと思われる講の金の窈者という設定に寄りかかるだけでなく、地の文や比較的葛藤関係の薄い人物の口を通してまで、市郎右衛門の人格的欠陥を観客に印象づけようとする。このこと自体は、文流自身が実在の市郎右衛門に引きずられたからとも考えられるが、もし文流のこの作品が、諷

訪春雄氏が推定されるように、近松の『心中二枚絵草紙』に先行するものであるとすれば、文流の施こしたこれらの文飾を近松が採用していないことには、近松のかなり自覚的な、人物造型に対する意識を見ることができているのではないだろうか。

近松は、『心中二枚絵草紙』の市郎右衛門を描くにあたって、観客に余計な先入観を持たせる詞章を一切省いた。そして、市郎右衛門と直接の葛藤関係が想定される養父介右衛門と敵役の善次郎によってのみ市郎右衛門を批判させているのである。

新地狂ひに身代あげ。方々の借錢堤ぎはの田地をも。七百日の質に入れ四貫目の手形したと聞く。かうした性になるからはこの介右衛門のことばによって、わたしたちは初めて、市郎右衛門がその放蕩ゆえに田地を質に借金をしていたことを知る。併せて、介右衛門の意識の中で市郎右衛門が疎外されつつあることも、この介右衛門のことばによって知るのであるが、近松には、介右衛門のこの意識がそのまま観客の意識にすり換らないようにするために、余計な先入観を抱かせる文飾を排する必要があった^⑥。それは、いいかえると、近松が市郎右衛門を劇中世界において疎外されるべき人物としては扱っていなかったということになるのだが、しかし、介右衛門の意識の中に見られた市郎右衛門に対するこのような疎外は、市郎右衛門に報恩講の金を盗んだ疑いが掛けられる場面では、単に

介右衛門の意識の中でだけのものではなくてしまふ。「身の油にて講中が。御開山へ奉るお茶所の銀」を預かった責任感と「盗人をとらへて見れば我が子」であつた口惜しさからくる介右衛門の嘆きによつて、市郎右衛門は一気に劇中世界全体の中で疎外された存在となる。そして、市郎右衛門は疎外された存在のまま観客の前に投げ出される。一旦は「鼻紙入はあけたれども金銀には手をさよはず。盗人は外にあらん心を鎮めて御詮索」と申し開きを試みた市郎右衛門であつたが、自分が養子であるとの介右衛門の告白によつて「いひ訳もなきしだら」となつてしまふ。葛藤の欠如を指摘される場面であるが、それにしても、疎外されたままの市郎右衛門の姿を観客はどのように見つめればよいのだろうか。疎外されるべき悪人としてその疎外を是認することもできようが、近松はそのようには市郎右衛門という人物を描いていなかった。それでは、疎外された市郎右衛門を救うものがあるのかないのか。あるとすれば、それは何か。ここでも私は、お島の存在を予想しているのである。そして、このあたりのお島の役割を調べることで、本曲における「女のドラマ」の所在が明らかになるのではないかと思われる。

(4) 「女のドラマ」の所在

これまで、私は、研究史を辿ることと作品の内部を分析すること

で、本曲に関する三つの疑問を提示した。もう一度要約すると次のようになる。

- (1) 主人公たちをとり巻く状況の複雑化が、なぜ女主人公の側に導き込まれたのか。
- (2) (広い意味での) 偶然性に支えられたプロットを統一的なものにするもの、あるいは、運命に弄ばれているかのような主人公たちの姿が惨めなものと映らないようにするものは何か。
- (3) 劇中世界で疎外された存在となつた市郎右衛門を救うものは何か。

ここでは、これら三点の疑問点を考えることを通して本曲における「女のドラマ」の所在を明らかにしたいのだが、そのためには、下之巻におけるお島の姿を検証するのが有効かと思われる。特に、酔いに紛らわせての暇乞の科白は、『曾根崎心中』の天満屋の場と同等の役割を持つものとして重要であるので、以下長くなが引用しておく。

ほんに誠にお主たる身がもつたいない。大事にかけて下さんす。是を思へば勤の身が心中などで死ぬるのは。お主へ対して不躰。損をかけるは身の罪科。さりながら死んだ者が生きかへりその入訳をいふにこそ。命にかへるものはないそれを捨てゝ身を果すはいふにいはれぬ詰まつた事。憎まうものでもござん

せぬ。かういうてわたしが心中する気はなけれども、爰にも前の初様に手懲の事も有るゆゑに。こりや前書の話ぞやわたしが馴染の市様の堪当は。弟御の無実の難を身にかづき。所の住まひもならぬとよ。是は何たる胸欲ぞやわしらが今の此の勤。だてにもはでにも身のためでも一日片時なる事か。親兄弟のいとしさゆゑ。おもしろからぬ勤をもつらいと一度いひやらぬは。親兄に苦をかけまいため。かほど大事の親里の。貧苦を助けしお主なれば。御恩はさらに忘れねども。生身は死身ことに又此の酒にあてらるゝ。もし頓死でもいたしなば下された茶が末期の水

お島・市郎右衛門の間に心中の約束ができていることを、観客はこのお島のことばではっきりと確認する。同時に、このお島のことばが、反社会な行為である心中に対する観客の批判を巧みに心情的肯定へと変化させる。遊女が「売りもの買ひもの」であるという社会的立場が本曲の中に持ち込まれていることは先に見たが、そういういた立場はまた、「勤の身が心中などで死ぬるのは。お主へ対して不躰。損をかけるは身の罪科」とお島自身の自覚するところでもあった。その弁えのあるお島なればこそ、「命にかへるものはないそれを捨てゝ身を果すはいふにいはぬれ詰まつた事。憎まうものでもござんせぬ」のことばによって、反社会的行為であるはずの心中が劇

中世界の秩序として容認され得るのである。そして、それは、お島がおはつ・徳兵衛の故事をひくことで一層強くなる。

本曲が興行的には『曾根崎心中』の成功に強く影響されたものであり、趣向の点でも『曾根崎心中』に負うものが多いことは周知のところである。だが、同様に本曲に多用されている趣向でも、『用明天皇職人鑑』からの趣向取りと『曾根崎心中』からのそれとでは、少しく次元を異にするものがある。『心中二枚絵草紙』の観客同様、『心中二枚絵草紙』の劇中人物たちにとっても、『用明天皇職人鑑』の世界は所詮操り芝居の世界であった。しかし、彼らにとって『曾根崎心中』は、彼ら自身の世界で過去に起った現実の出来事だった。たとえば、天満屋の下女の「お初様のかの夜さり。二階の梯子を踏みはづしおれが胸骨踏まんした。形見の痛さ」は、現実には女が体験した痛さであったわけだし、浄るり芝居の種になることに對する天満屋の主人や女房の心配は、かつて実際にお初の心中を浄るりに仕組まれた苦い経験によるものである。つまり、『心中二枚絵草紙』の中で『曾根崎心中』からの趣向取りがなされるということは、そこに『曾根崎心中』の演劇的時空が持ち込まれるということでもあった。そして、『曾根崎心中』の世界を受け容れた観客であればこそ、「てんまやにまた見るゆめ」^⑧である本曲でおはつ・徳兵衛の故事が引かれ、『曾根崎心中』の演劇的時空が現出すること

よって、お島・市郎右衛門の心中が容認し易いものになったと思われる。いずれにせよ、外のだれでもないお島が、死なねばならぬ二人の立場を語ることによって、主人公たちの心中という行為に對して、観客の側に異化的作用が起こるのを防いでいるということでは確かである。そして、観客に倫理的見地からの拒否反応を起こさせない責任を担わされたお島であつてみれば、「売りもの買いもの」といった立場以上の複雑化された状況に彼女を置くことは、彼女自身に観客の批判の目が向きかねないものを抱え込むことであり、それゆえに近松は、『心中二枚絵草紙』では、女主人公の側に複雑化された状況を設定することを避けたのである。

ところで、お島の持つこのような力は、全く同様のかたちで、市郎右衛門の救済においても有効なものとなつていようである。市郎右衛門は、中之巻の介右衛門の嘆きによって劇中世界における疎外者の立場に追い込まれていた。だが、しかし、一旦は疎外された市郎右衛門は下之巻において、

わたしが馴染の市様の堪当は、弟御の無実の難を身にかづき、所の住まひもならぬとよ。是は何たる胸欲ぞや。

とお島が語るることによって救済されるのである。もちろん、お島が何と言おうと現実には市郎右衛門の嫌疑が消えるわけではない。しかし、観客にとってお島のこのことばは、疎外されたまま死んでい

く市郎右衛門の姿を見なければならぬみじめさから解放してくれるものであつたらう。それは、ちょうど、心中の反社会性が、お島のことばによって観客の心の中で感情的肯定へと変質していったように、お島が、おはつ・徳兵衛の故事を引きながら市郎右衛門の弁護をすることで可能になつたのである。

このように考えてみると、お島の暇乞の場面はかなりのインパクトを与える場面であることがわかる。とすると、残された問題に對する答も、善次郎の「発起」が外ならぬお島のことばによつてであつたことを思い併せれば明らかになつてくる。善次郎の気持ちが生市郎右衛門に伝わらなかつたこと、それは（広い意味での）偶然の所産であつたが、そして観客もその不幸な運命のゆえに涙を流したのであつたが、それらの現象の裏側では、善次郎や市郎右衛門がいるとも知らずに自分の真情を吐露したお島のことばが力を持つて劇中世界の進行を支えているのである。「時雨の闇の本意なさよ」と運命のいたずらを嘆く語りは、顧みれば「心は三つに交れども同じ涙」を流すまでに三人の心が寄り添つていたことを前提としたものでもあつた。とすると、その偶然性によりかかつた事件の展開にもかかわらず、本曲のプロットに統一感を与え、運命に弄ばれているかに見える主人公たちの死に對して観客が流した涙を、惨めな涙とさせないのも、また、お島の力といえるのではないだろうか。

以上まとめると、『心中二枚絵草紙』は次の点において「女のドラマ」たり得たといえそうである。

(一)主人公たちの心中の決意を観客に知らせ、心中という反社会的行為を劇中世界の秩序として観客に納得させる役割をお島が担っている。

(二)状況の複雑化によって当然起こるべき男主人公の劇中世界における疎外をお島が救済している。

(三)偶然性に支えられることの多いプロットを統一的なものとし、運命に弄ばれた結果の心中を見ることからくる後味の悪さを観客の側から取り除く力をお島に持たせている。

これらのうち第一の点と第二の点は特に、『曾根崎心中』以後の近松が否応なく辿らなければならなかったところの作劇法上のあの苦悩と深く関わっているものであろう。

『曾根崎心中』でおはつ・徳兵衛の恋愛悲劇の創造に成功した近松は、しかし、やがて恋愛悲劇を単に主人公たちへの恋の賛美だけで完結させることができなくなる。心中浄るりが心中浄るりとしてパターン化していった時、主人公が自らの恋を心中によって成就させようとするこの反社会性に人々は気づきはじめ、主人公たちの悲劇にまき込まれてゆく周囲の者たちに目を向け始める。当時の観

客のレベルは知らない。しかし、近松自身は観客の目がこのような方向に向かざるを得ないものであることを予想していた。そして近松の目がこのような深まりを見せ始めた時、『曾根崎心中』で発見した「女のドラマ」を、小稿で見たような形に発展させることで、お島・市郎右衛門の恋愛悲劇を恋愛悲劇そのものとして完結させようとしたのであろう。だが、それとて、お島の側の状況の複雑化を避けるといった消極的な形で可能になったものであり、やがて、近松の世話浄るりは恋愛悲劇を恋愛悲劇そのものとして完結し得ないものとなってゆくのである。

① 向井芳樹教授「『曾根崎心中』の方法」女のドラマ」の発見」(『同志社国文学』本号)

② 昭和三十二年四月・未來社。

③ 『近松世話浄瑠璃の研究』(昭和四十九年四月・笠間書院)。

④ ②に同じ。

⑤ ②に同じ。

⑥ ②に同じ。

⑦ 「宝永三年の近松——世話浄瑠璃の方法をめぐって——」(『文学』昭和

和四十二年一月号)。

⑧ 『心中二枚絵草紙』論』(『近世文芸』38号・昭和五十六年五月)。

⑨ 『心中二枚絵草紙』の本文は諏訪春雄氏校注の『近松世話物集(一)』

(角川文庫・昭和四十五年十二月)による。

⑩ この点に関しては本学一九八〇年度生の佐野昭洋君の論に負うところが大きい。小稿では、本学向井芳樹教授の御厚意により、佐野君の卒業

論文『心中二枚絵草紙』の独自性——『心中抱合河』との比較を中心にして——」を参考にさせていただいた。

⑦に同じ。

⑫ 『心中抱合河』の本文は諏訪春雄氏校注の『近松世話物集(一)』(角川文庫・昭和四十五年十二月)所収のものによる。

⑬ ⑬に同じ。

⑭ 介右衛門のこの科白以前に善次郎が借錢取りに対して「兄市郎右衛門のうつけもの。天満屋のお島にぐわらりと片はな打明けて。親父の機嫌さんぐにて半勘当の身となった。」と市郎右衛門を卑しめる場面がある。敵役である善次郎のこの科白が、観客の市郎右衛門に対するイメージをマイナスの方向に向けるものでないことは言うまでもないが、近松はこの場合でも、まず中之巻の冒頭で、「善次郎なれど悪性のも」と善次郎の市郎右衛門批判を相殺する文飾を用意していたことも注意したい。

⑮ 本曲の十三行十丁半本題簽。

執筆 者 紹 介

稲田 秀雄

本学大学院昭和五十八年度修了生
京都市立紫野高等学校講師

山崎 睦也

本学大学院学生

鈴木 一夫

本学大学院学生

向井 芳樹

本学教授

小川 嘉昭

本学昭和五十四年度卒業生
大阪府立布施工業高等学校教諭

田 中 馨

本学大学院昭和五十七年度修了生
大阪府立泉陽高等学校教諭

有馬 輝臣

本学教授

山田 和人

本学講師

シ ャ リ ー ・ フ ェ ノ Visiting Scholar